

JICA地球ひろば主催（後援：日本国際理解教育学会）  
国際理解教育／開発教育指導者研修

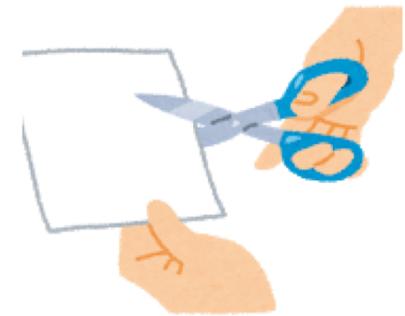
2020.8.9.

# 授業素材を選ぶ、切り取る

帝京大学 中山京子

異文化や国内外で起こっている社会事象から素材を選ぶ、切り取るということ

- 「教材化」という「正当な理由」がもたらす弊害
- 対象について第3者が自分のものさしで相手を眺める行為
- 「観光」に似た部分

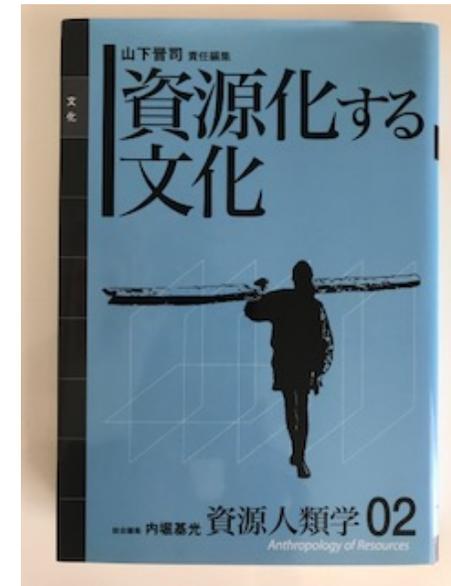


# 異文化や対象とする場所を「切り取る」 行為を考えるために

- 『イメージ人類学』 ハンス・ベルティンク、平凡社、2014年
- 『観光のまなざし』 ジョン・アーリ、法政大学出版会、1995年年



- 『観光の社会心理学-ひと、こと、もの3つの視点から-』  
前田勇・佐々木土師二監修、北大路書房、2016年
- 『場所を消費する』 ジョン・アーリ、法政大学出版会、  
2003年
- 『資源化する文化』 山下晋次司編、弘文堂、2007年



## 国際理解教育・開発教育において 「授業する」ということを再度考え直す

- 「教師」という職業についている人間が、自分で解釈し、「授業」という形で児童生徒に語るということ。
- 「全体から部分を切り取っている」主体は自分であるという自覚が必要。
- 自分が捉えたものは一部、理解していることは一部であり、すべてではない。
- まるで「すべて」のように受け手が錯覚するような話し方や教材化はしていないだろうか。

# 教師と児童生徒のズレ



- 自分の脳裏にある風景や理解は学習者の中には存在していない
- 切り取って提供する情報が学習者にとっては「すべて」になる場合が多い  
ex. 小学校 6 年社会科「サウジアラビア」



# 資料館、博物館、展示室



- 資料館、博物館、展示室にある目の前の資料は、「誰か」によってすでに「切り取られ」て存在している。
- 「誰か」 = 研究者、専門家、現地での生活者、開発教育や国際理解教育に強い関心を持つ教師
- JICAだから安心？大学の教員だから間違いない？  
→間違いないだろう。しかしすべてではない。

## 授業づくりに向けて

- 「切り取られて存在しているもの、情報」を学習者とのようにつなぐか
- 自分の授業で活用したい情報・素材の収集
- 伝え方をどうするか